



時代が変わる、時代を変える

一人も落ちこぼさない教育の実現を目指して

白井智子さん

NPO法人トイボックス代表理事
スマイルファクトリー代表／スマイルファクトリーハイスクール校長
文部科学省中央教育審議会教育振興基本計画部会委員
文部科学省フリースクール等に関する検討会議委員

——トイボックスではどんな活動を？

不登校の子どもたちを支援するスマイルファクトリーという教育活動と市民ホールなどの公共施設の管理・運営を行うキャンプロジェクトという地域づくりの活動をしています。地域づくりは、共同代表の栗田拓の地域環境づくりというベースをきっかけに始めました。今までは別事業だったのですが、課題が被ってきています。例えば不登校の子どもたちのスクールとして現在活用している旧伏見台小学校は、ニュータウンの高齢化・少子化が原因で閉校になり、フリースクールに転用することになりました。不登校の解消という形で子どもたちを元気にしても、地域が元気にならないと成長した子どもたちの受け皿がありません。そこで、教育を中心とした地域づくりという形で、一緒に活動するという場面も多くなっています。

——「日本の教育制度に乗れない子どもたちのいいところを伸ばしたい」という

白井さんの出発点は、不登校の子どもたちの通うスマイルファクトリーですね。具体的にはどういう授業・活動をするんですか？

不登校の子たちを見ているうちに、発達障がいを持っている子が多いと気づきました。不登校の2大原因は学習とコミュニケーションなので、午前中は個別学習支援です。学年とか関係なしに、自分のつまづいたところから戻ってやったらいいんだよ。質問してくれたら説明するし、先生が見てつまづいているなと思うと、1対1で指導します。それぞれ課題や認知が違うのでこまやかに対応します。

——認知というのは？

知識の入りが、目から入る子、耳から入る子、体験しないと分からない子、全然違うんです。例えば、何回練習しても漢字を覚えられない子、それこそ反抗しているんじゃないかと思われるんだけど、検査を

してみると、実はその子にとっては漢字が絵のようにしか見えていない。それで何回やっても覚えられなくて自信をなくし、書くことに対する抵抗感がどんどん強くなって「字を書くのが面倒くさい」と言い始める。だけど、それはただ単に自信がないだけ。こだわりが強く、完璧主義な子が多いので、100できないんだったら、最初から「俺、どうせ勉強してないし」と言えた方がまだ格好つくと思ってる。だから「完璧を目指す必要なんてない。ここでは間違っただけで恥ずかしくない。むしろ間違えないと成長しないもんね」と話します。最初は得意科目、慣れてきたら徐々に苦手科目もやると、自分のペースでできるので、分かるところはすいすい行けるし、でその子なりの学習の仕方、伸び方をしていきます。

——コミュニケーションについてはどういう授業を？

午後に体験学習という形で、コミュニケーション能力の勉強。これはほぼシミュレーション。子どもたちに「相手の気持ちになって考えてみてよ」と言っても「分からない」と言う。そんなわけないでしょと思われちゃうんですが、本当にどんなに考えても分からない。「共感性が薄い」という特性の子も多いんです。だけど「相手の子はこういうふうに感じたんだって」と言うと、素直に「そうなんだ。じゃあ次からはやめるよ」となる。こういう言い方をしたら相手はこう思うよ、次からはどういう言い方をしたらいいかな？というのを徹底的にやります。みんなの前で「何でそんなこと言うの」と言うと、もう頭が真っ白になって、恥かしいや、何を言われたか覚えていない、ということになるので1対1。これを繰り返すと、本人もこういう言い方をしたらいいんだなと分かっていくわけです。今までだったらトラブルがあったら「もう学校に行かない」だったのが、トラブルって乗り越えられるんだ、しかも乗り越えたら前より仲良くなれちゃった、そういう経験を人生で初めてする。この経験が非常に大きいんです。最初は手取り足取りで一緒にトラブルを解決するけれど

も、そのうち自分でできるようになって、自信もついて、人との付き合い方や距離の取り方、対応の仕方を自ら考えるようになってきます。その上、他の人のサポートもできるようになる。そうするとそろそろ学校に、となってきます。

——感動的ですね。学校に戻るときには学校と連携するんですか？

子どもたちがうちに通い始めたときから、学校の先生方が子どもたちの様子を見に来られます。学校に行くのは緊張するけど、自分の安全地帯であるフリースクールに先



生が来るのは本当に喜びます。そこで先生方に子どもと1対1の関係を作ってもらって、本人が元気になって学校に行きたい気持ちが芽生えてきたら、先生から学校に誘っていただいたりもします。子どもたちが「あの先生がいるんだったら学校に行ってもいいかな」という感じ。「ちょっと今日から学校行ってみるわ」って、それで学校に復帰しちゃう子もいます。もちろん、うちに通った日数を学校に伝えますし、中学校の中間・期末テストをうちで受けて、それで内申点も稼げたというので安心感や自信を取り戻すということもあります。こういう連携は子どもにとってすごく大きいと思います。出席日数も、昔携わったフリースクールでは認められませんでした。そのときの第1期生がうちのスタッフをやっているのですが、彼らが「うらやましい」と言います。ちゃんと卒業資格が与えられるわけですから、その後の選択肢も広がりますよね。この取り組みは全国でも池田市とうちが初で、全国で注目されているようです。

——卒業した教え子が戻ってきて教えているのですか？

そう、自分たちは教育で傷つけられたけれども、結局教育にもう一回助けられたというので、教育、保育、福祉を目指して、保育士や、児童養護施設、幼稚園、教育で子どもを支える側を目指している子、実際になった子は多いです。教え子たちが育って、同じ方向を向いて一緒に仕事の改善などができている時なんか、ああ、やってよかったなあと本当に嬉しいです。

——弁護士との連携は？

鑑別所や少年院から来たという子に関わるケースもあり、弁護士さん、警察、保護司さんと連携する機会もあります。最近は少年犯罪や非行と発達障がいに関わりがあることに弁護士さんや警察が気づいていますが、サポート体制がまだまだ足りないと思っています。「親の育て方が悪い」だけで片付けられてしまうことも多い。実は、発達障がいの対応をきちんとすればこんなことにならなかったケースも沢山あります。親



写真提供: NPO 法人トイボックス

は専門外ですし、子どもと似たような特性を持っていることも当然多いので、親だけを責めても解決にならないのにそのままにして子どもが再犯、みたいなケースを見ると辛くなります。その子の特性や環境の理解と、それに対応するプロの人材、法律が必要です。関係機関が連携して、真剣に更生できる環境を作っていくことが何より本人、家族だけでなく、社会、地域のためにも大事だと考えています。

——弁護士への要望は？

弁護士さんだけじゃないのですが、発達障がいの子どもの問題じゃないということです。発達障がいって文部科学省の統計でも6.5%、現場感覚だと10%です。少なからずそういう傾向がある人は多いのです。社会が、発達障がいの特徴を知らなかったり、知っていても無視したりして、発達障がいの人に「他の人と同じにやれ、やれるはずだ」と無理強いしては問題はどんどん大きくなります。まず人は誰しも能力に凸凹があること、その強弱は人によって違うことの認識が重要です。その上で、組織になじめなかったり、コミュニケーションが円滑にいかなかったりする人がいたら、対応方法を変えてみたらどうだろう、専門家に相談してみようかとかいう方向で考え

てもらえたらありがたいです。

——活動を始められたときと今の大きな違いは？

この活動を始めたのは13年ぐらい前で、実は、学校や教育委員会からものすごく警戒されていました(笑)。学生運動の延長線上で学校と敵対するフリースクールもありましたし、学校の指導を否定する人たちと捉えられていたんです。私たちは「学校も不登校にご苦労なさっていますよね、その荷物を一部いただきたい、一緒にやっていきたい」という言い方でアプローチしました。最初は「不登校は子どものせい」「なんでわがままな子、怠けている子を助けなアカンねん」という感じでしたが、ちょうど「発達障がい」というワードが出だして、わがまま・怠惰なのではなく、本人たち自身が自分のこだわりから抜けられなくて苦労しているということを少しずつ社会が分かってきた。そうすると、学校の先生も、今までは「不登校＝学校が悪い」と自分たちが責められるんじゃないかと考えておられたけれど、「発達障がいという型があるんだ、子どもは多様なんだ、今までの教育は全員には通用しないんだ、個別支援が必要な子たちが厳然といるんだ、学校もそこまで対応できていなかったかもね」と認識する方が増えて

きたので連携が取りやすくなったんだと思います。先生方の協力体制ができてきたので、うちへの滞在期間も短くなりましたね。そしてとうとう2016年12月には教育機会確保法というフリースクールを視野においた法律もできました。うちが、教育委員会と信頼関係を築いて、完全に連携を組んで、13年もやってきたということは、法律ができる上ですごく大きなことだったと言えます。

——トイボックスがたまたま非常に恵まれただけで、どこのフリースクールでもできるわけではないという意見もありますよね。

確かに、現在の日本で自治体とここまで深く連携している例は少ないかもしれませんが、でも、それは制度がなかったのが一因です。今回、法律ができ、しっかり制度化されていくと、それに伴って人材の育成ができて、うちみたいな学校も増えてくるだろうと期待しています。

——今後の夢は？

変わるときというのはわっと変わるんだなというのが分かったので、本当に1人も落ちこぼさない教育を日本で実現できる時代が来るんじゃないかと思うようになってきました。例えば、発達障がいの子を伸ばす教育方法についての研究成果は沢山あるんです。ところが、全然現場に導入できていない。私が参加している国の審議会でも、これからは科学的な根拠に基づいていこうとか、企業や大学が研究している成果も学校教育に取り入れていこうとか、そういう時代にやっとなってきたかなと。これ、私が生きているうちにできると思ってきたから、そこをやらなきゃいけない、大人の責任だなと思っています。

——弁護士も頑張れと。

是非よろしくをお願いします。

——エール、ありがとうございます。また、本日はお話をありがとうございました。

ありがとうございました。

(Interviewer: 寒川 智美)
Photo: 高廣 信之)